



藪の中

芥川龍之介



青空文庫



青空
文庫

検非違使に問われたる木樵りの物語

さようでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違いございませぬ。わたしは今朝いつもの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があったのでございます。あつた処でございますか？ それは山科の駅路からは、四五町ほど隔たつて居りましょう。竹の中に痩せ杉の交つた、人気のない所でございます。

死骸は縹の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつたまま、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたようでございます。いえ、血はもう流れては居りませぬ。傷口も乾いて居つたようでございます。おまけにそこには、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないように、べつたり食いついて居りましたつけ。

太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございませぬ。ただその側の杉の根がたに、縄が一筋落ちて居りました。それから、——そうそう、縄のほかにも櫛が一つございました。死骸のまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございませぬ。何、馬はいなかつたか？ あそこは一体馬なぞには、はいれない所で

ございます。何しろ馬の通^{かよ}う路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

検非違使に問われたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃でございましょう。場所は関山から山科へ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は牟子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確かに法師髪の馬のようでございました。丈でございますか？ 丈は四寸もございましたか？

——何しろ沙門の事でございますから、その辺ははつきり存じません。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携えて居りました。殊に黒い塗り箆へ、二十あまり征矢をさしたの
は、ただ今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかようになろうとは、夢にも思わずに居りましたが、真に人間の命などは、如露亦如電に違いございませぬ。やれやれ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。

検非違使に問われたる放免の物語

わたしが搦め取つた男でございますか？ これは確かに多襄丸と云う、名高い盗人でございます。もつともわたしが搦め取つた時には、馬から落ちたのでございませう、粟田口の石橋の上に、うんうん呻つて居りました。時刻でございますか？ 時刻は昨夜の初更頃でございます。いつぞやわたしが捉え損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。ただ今はそのほかにも御覧の通り、弓矢の類さえ携えて居ります。さようでございますか？ あの死骸の男が持っていたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いございませぬ。革を巻いた弓、黒塗りの箆、鷹の羽の征矢が十七本、——これは皆あの男が持つていたものでございませう。はい。馬もおつしやる通り、法師髪の月毛でございます。その畜生に落されるとは、何かの因縁に違いございませぬ。それは石橋の少し先に、長い端綱を引いたまま、路ばたの青芒を食つて居りました。

この多襄丸と云うやつは、洛中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。昨年の秋鳥部寺の賓頭廬の後の山に、物詣でに来たらしい女房が一人、女の童と一しよに殺されていたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乗つていた女も、こいつがあつた男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりませぬ。差出がましゅうございませぬが、

それも御詮議ごせんぎ下さいまし。

検非違使に問われたる媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。が、都のものではございませぬ。若狭の国府の侍でございます。名は金沢の武弘、年は二十六歳でございました。いえ、優しい氣立でございますから、遺恨なぞ受ける筈はございませぬ。

娘でございますか？ 娘の名は真砂、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬくらい、勝氣の女でございますが、まだ一度も武弘のほかには、男を持った事はございませぬ。顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔でございます。

武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立つたのでございますが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございしましょう。しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願いでございますから、たとい草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございます。婿ばかりか、娘までも………（跡は泣き入りて言葉なし）

×

×

×

多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？

それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問ごうもんにかけられても、知らない事は申されますまい。その上わたしもこうなれば、卑怯ひきような隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日きのうの午少ひるし過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子ひょうしに、牟子むしの垂絹たれぎぬが上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはそのためもあつたのでしよう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩にょぼさつのように見えたのです。わたしはその咄嗟とつさの間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなどは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うばうとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀たちを使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派りっぱに生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どち

らが悪いかわかりません。(皮肉なる微笑)

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科やましなの駅路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作ぞうざはありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚ふるづかがある、この古塚を発あいて見たら、鏡や太刀たちが沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪やぶの中へ、そう云う物を埋うずめてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それから半時はんときもたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路やまみちへ馬を向けていたのです。

わたしは藪やぶの前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲かわいていますから、異存いぞんのある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待っていると云うのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理がありますまい。わたしはこれも実を云えば、思う壺つぼにはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはりました。

藪はしばらくの間は竹ばかりです。が、半町はんちようほど行った処に、やや開いた杉むらがある、

——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合のいい場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もつともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早いのか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いているだけに、力は相当にあつたようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまいました。縄ですか？ 縄は盗人の有難さに、いつ塀を越えるかわかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頬張らせれば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも凶星に当たつたのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠を脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいつて来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛られている、——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐から出していたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈しい女は、一人も見つた事がありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹を突かれたでしょう。いや、それは身を躲したところが、無二無三に斬り立てられる内には、どんな怪我も仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかこう

にか太刀も抜かずに、とうとう小刀を打ち落しました。いくら気の勝った女でも、得物がなければ仕方ありません。わたしはとうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、———そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかったのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違いのように縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添いたい、———それも喘ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました。(陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、———わたしの念頭にあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまったでしょう。男もそうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかったのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しまし

た。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしると云いました。(杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです。)男は血相を変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つて居るのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。(快活なる微笑)

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉に、断末魔の音がするだけです。事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早い、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。——わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなり、すぐにまたもとの山路へ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事は申し上げるだけ、無用の口数に過ぎますまい。ただ、都へはいる前に、太刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ

一度は樗おうちの梢こずえに、懸ける首と思つていますから、どうか極刑ごっけいに遇わせて下さい。
（昂然こうぜんたる態度）

清水寺に来れる女の懺悔

——その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまふと、縛られた夫を眺めながら、嘲るように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶えをしても、体中にかかった縄目は、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしをそこへ蹴倒しました。ちょうどその途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿っているのを覚りました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震いが出ずにはいられません。口さえ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑んだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまいました。

その内にやつと氣がついて見ると、あの紺の水干の男は、もうどこかへ行つていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛られているだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。や

はり冷たい蔑みさげすの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しき、悲しき、腹立たしき、——その時のわたしの心の中うちは、何と云えば好よいかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りしました。

「あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥はじを御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌いまわしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂さけそうな胸を抑えながら、夫の太刀たちを探しましたが、あの盗人ぬすびとに奪われたのでしょうか、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀さすがだけは、わたしの足もとに落ちています。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やっと唇くちびるを動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑はなだんだまま、「殺せ。」と一言ひとこと云つたのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹はなだの水干の胸へ、ずぶりと小刀さすがを刺し通しました。

わたしはまたこの時も、氣を失つてしまったのでしよう。やつとあたりを見まわした時に

は、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交まじった杉むらの空から、西日が一すじ落ちています。わたしは泣き声を呑みながら、死骸しがいの縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなったか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力ありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀さすを喉のどに突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢じまんにはなりません。（寂しき微笑）わたしのように腑甲斐ふがないものは、大慈大悲の觀世音菩薩かんぜおんぼさつも、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人ぬすびとの手ごめに遇つたわたしは、一体どうすれば好よいのでしょうか？ 一体わたしは、——わたしは、——（突然すずり烈みなぎしき歎なげ歎）

巫女の口を借りたる死霊の物語

——盗人は妻を手ごめにすると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。体も杉の根に縛られている。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真に受けるな、何を云っても嘘と思え、——おれはそんな意味を伝えたいと思つた。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやつている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ、——盗人はとうとう大胆にも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうつとりと顔を擡げた。おれはまだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有に迷つていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔恚に燃えなかつたためしはない。妻は確かにこう云つた、——「ではどこへでもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、いまほどおれも苦しみはしま

い。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち顔色を失ったなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません。」——妻は気が狂ったように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まっ逆様さかさまにおれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるうか？ 一度でもこのくらい、——（突然、ほとばし迸ることとき嘲笑ちやうしやう）その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺して下さい。」——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋すがつてゐる。盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒けたおされた、（再びふたたび迸ることとき嘲笑）盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事はただ領うなずけば好よい。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦ゆるしてやりたい。（再び、長き沈黙）

妻はおれがためらう内に、何か一声叫こゑぶが早い、たちまち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟とつさに飛びかかったが、これは袖そでさえ捉とらえなかつたらしい。おれはただ幻のように、そう云う景色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去った後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄なわを切った。「今

度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまふ時に、こう呟いたのを覚えてゐる。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がある。おれは縄を解きながら、じつと耳を澄ませて見た。が、その声も気がついて見れば、おれ自身の泣いてゐる声だったではないか？ (三度、長き沈黙)

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光つてゐる。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまつた。ああ、何と云う静かさだろう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに来ない。ただ杉や竹の杪に、寂しい日影が漂つてゐる。日影が、——それも次第に薄れて来る。

——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとしたりした。が、おれのまわりには、いつか薄闇が立ちこめてゐる。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまつた。……………

(大正十年十二月)



藪の中

芥川龍之介 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「芥川龍之介全集 4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 1 月 27 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 7 月 15 日第 8 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

※ 底本の中見出しは、ゴシック体で組まれています。-> ヒラギノ角ゴシック ProN W6 にしました。

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997 年 11 月 10 日公開

2004 年 3 月 9 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ